

「元ちゃんハウス」を訪問して
長野県小諸市 市川 強

6月25日(日)の午後、金沢大学病院の近くにある「元ちゃんハウス」を萩原奈緒先生ファミリー、星野さん始め総勢11名で訪問しました。綿谷先生やスタッフの小石川様、米森様、桜井様、そして故西村元一先生の笑顔のお写真が出迎えてくださいました。

とても素晴らしい施設で、スタッフも医師、看護師、ピアサポーターなど正会員が20数名で活動され、また一級建築士2名が施設の設計整備をしています。

室内はとても明るく、採光がたくさんあり、中庭(坪庭のような)は、吹き抜けのような広がり心癒される空間だと思いました。調度品、壁、天井もベージュや白を基調としてとても爽やかでした。三階の一枚板のセンターテーブルは皆さんを優しく迎えてくれるような感じがしました。運営の仕方、イベントなどの説明をお聞きし、グループ分けしての意見交換、日常から離れ、自分を見つめ自分を取り戻すための場づくり、話しやすい環境づくりに工夫がされていて、樋野先生が仰っている「マイナス×マイナス＝プラス プラス×マイナス＝マイナス」の考えが感じられました。

四階のセミナールームにはオストミー用のトイレが設置されていて患者さんへの心配りがされていました。今回の訪問で「がん哲学カフェのあり方」を勉強できたと思います。綿谷先生、小石川先生。雨の中、金沢駅までお送りいただき、ありがとうございました。



「御手にゆだねて」
メディカル・カフェ in 帝塚山 若生 礼子

‘14年9月茹で卵大の脳腫瘍の発見そして摘出手術が半週の内に行われ初めのMRIの病院に戻り、全身の検査を受け原発は肺、脳にあと50個の腫瘍との結果を聞く。「ステージIV、でも正常な細胞はそれよりはるかに多くあります。一つの持病を持ったと思って長生きしましょう」と。その検査入院中にステージIVで5年、7年、通院治療されつつお元気で前向きな患者さん達に出会い「神さまからの贈り物」と話していた。「末期」となっても何年も生きることが可能な医療、医薬品の進歩の現実と直面し、患者同士の声掛けや情報交換(良い意味での)が大きな意味を持つ時代に生かされていることを思い何らかの形でそのような場を、との願いが心に膨らみ始めていた’15年春。娘たちの教会で樋野先生のがん哲学外来とメディカル・カフェが行われたことを知る。

その半年後、鳴門の教会で樋野先生の集会有るとのお誘いを受け高速バスで駆けつけ、初めて先生に直接お会いした。病歴や患者同士の交流への思いをお話しし、すぐにカフェ開設の段取りを始めて下さる。以来、大阪市内と堺の二カ所で毎月一度、カフェを始め1年8か月。テキストも2冊目となり先生のご著書に聖句をコラボさせたオリジナルの形で進めさせて頂いている。先の読めない一患者の思いに一抹の不安もなく、即実践へと背中を押して下さった先生、臨床や医薬品、遺伝子研究など多くの分野で患者達を支えて下さる方々の熱意と誠実にお応えし、神さまが生かして下さる限り精一杯飲みつつ感謝しつつ祈りつつ。



1周年記念で樋野先生をお迎えした日 2016.11.01

～がんの陰に隠れないで～ 小林麻央さんはブログを通して樋野先生の「言葉の処方箋」を支えに闘病されていましたが6月22日に逝去されました。(享年34歳)

再開1回目のブログのタイトルは、「なりたい自分になる」。

文面から、ある先生と出会ったことをきっかけとして、自分の生き方を問いなおす哲学的な側面と、闘病中の苦惱を乗り越えようとする「覚悟」が見て取れる。

がん患者の人間性に寄り添い、その尊厳を大切にしている一般社団法人「がん哲学外来」の理事長で、順天堂大学医学部の樋野興夫教授は、「ブログの先生は、人間的な責任で、手を差し伸べられたと思う」と語る。

大悟なき人生を歩む